

短編小説翻訳の試み（2）

黒 澤 純 子

愛知東邦大学

短編小説翻訳の試み（2）

黒澤 純子*

1. はじめに
2. 方法
3. 翻訳が困難であった事項
4. おわりに
5. 試訳

1. はじめに

この研究ノートは、平成29年6月『東邦学誌』で発表した「短編小説翻訳の試み」の続編である。A大学にて筆者が半期15回で行った「Reading & Interpretation」の授業について、そしてその成果として、短編の試訳を掲載する。前回の研究ノート同様、私たちは原文を翻訳する際、どのような事項に注意を払い訳したか、また今期は日記をテキストに選んだことでどのような難しさがあったのかについても述べる。

2. 方法

2.1. 授業内容と進め方

対象クラスは、2年生以上の選択のクラスで、履修者は2クラス、計30人であった。この授業は教職の授業としても選択できるため、履修者の内1人は3年生であった。テキストはイギリスの作家、トーマス・ハーディの短編『アリシアの日記』を使用した。

このテキストを元に、講師がテキストの注を付け、さらにテキストに沿って内容理解のための質問事項をまとめ、解答を書き込める小冊子を作成しそれを使用した。

テキストの選択の理由は、英文学科の学生にとって適切な難易度と内容であること、また前年に読んだ作品と重ならず、日記形式のテキストにも挑戦してほしいと考えたからであった。

授業の目標は翻訳という作業を通して学生各自の持っている英語力を向上させること、そしてそのために一つでも多くの語彙を増やすことである。加えて、「翻訳に際し、適切でわかりやすく、読者をひきつけるような魅力ある日本語に訳すこと」（黒澤, 2017）である。授業内容と進

* 愛知東邦大学非常勤講師

め方は、履修者全員がテキストの予習をしていることを前提にして進めた。履修者全員で翻訳の分担をし、担当者が事前に担当箇所を講師に提出した。講師が担当者の訳を印刷後配布し、担当者が訳を発表する形式をとった。担当者が中心となって、クラスみんなで訳を確認し、誤訳、言葉の選択の正しさ、および必要な箇所に修正を加えていった。

一回の授業では、日記の3日から4日分、テキストのページとしては、1ページから1ページ半進めた。一人が担当する量は、区切りのよい日記の1日分としたが、長い箇所は二人で分担し、一人おおよそ12行、130語を訳した。昨年のテキストに比べると、語数では倍の量に増え訳すのに難解な文章は何箇所もあったが、日記形式は比較的學生にとって読みやすかったようであった。最終的に14回の授業で進んだのは作成した小冊子の19ページ強で、原文テキストでは第4章の約半分のところまでだった。半期という短い時間の中で訳をじっくりと検討する作業には時間は必要だったため、短編とは言え最後までテキストを終えることはできなかった。

この授業で使用したリフレクション用紙については、短編小説翻訳の試み（黒澤，2017）と同じ内容のため割愛する。

2.2. 評価法

担当者が担当する訳（ハンドアウト）の発表（30%）と筆記試験（70%）と授業中の意見交換時の参加の状況によって総合的に評価した。履修数と授業進度の兼ね合いから、訳の担当回数が2回の学生と3回の学生がいたが、その点については評価する上で学生間で不公平にならないよう配慮した。筆記試験については、授業で進んだところまでを試験範囲とした。

3. 翻訳が困難であった事項

3.1. 書き手の語調の訳し方

テキストには日記形式なので、書き手の語調をどのようにするかを決めるのが難しかった。書き手のアリシアは「私」と統一した。妹や母親によく使用されていた形容詞、‘dear’，‘poor’，の訳は文脈に即して同じ形容詞にならないように考えた。また、アリシアの両親の呼び方（書き方）は家庭環境や親子関係を考慮した結果、最終的に「お父様」と「お母様」に統一した。日記の記述の言葉も丁寧な言葉を使用するように心がける一方、日記の記述が多い日においては、丁寧な言葉を何度も使うことによって回りくどい表現にならないようにした。

3.2. 観光地と歴史についての理解

第1章で、妹のキャロラインが行きたがるであろうパリの観光地についての記述がある。

“She (Caroline) will demand to be taken everywhere — to Paris continually, of course; to all the

stock shrines of history's devotees; to palaces and prisons; to kings' tombs and queens' tombs; to cemeteries and picture-galleries, and royal hunting forests.” (p. 1) これらの場所の名前はテキスト中には出てこないため、“all the stock shrines of history's devotees”（歴史愛好家が行くすべての旧跡）“palaces and prisons”（宮殿や牢獄）、“kings' tombs and queens' tombs”（王や女王の墓）と訳したが、街中にある牢獄とは何なのか、墓地が名所になっているのかについても考えた。観光ガイドとパリにいったことがある学生と講師の経験を参考にして数々の名所旧跡が挙げられた。「ノートルダム寺院」、マリー・アントワネットも投獄された「コンシェルジュリー」という牢獄跡、王家の墓所の「サン・ドニ大聖堂」、ボナパルト・ナポレオンの廟もある「アンヴァリッド」（廃兵院）、「カタコンブ・ド・パリ」（共同墓地）などである。また、美術館は年代も確認しながら、「ルーブル美術館」、「クリュニー中世美術館」の名前が挙げられた。また、パリやベルサイユから行くことのできる“royal hunting forests”（王室の狩猟場）はパリ西部にあるブローニュの森か、パリの東にあるヴァンセンヌの森（Bois de Vincennes）、あるいはパリからは65キロほど離れているフォンテーヌブローの森のことを言っているのか、についても考えた。実際の観光地がどこであるのかを考える必要があるのかは、私たち訳者そして読者に委ねられるが、原文をそのまま場所の羅列として訳して終わらすのではなく、原文を元に地図を見ながら考えることも興味深かった。

また、歴史の知識も必要な箇所があった。7月21日の妹の婚約者の国籍について言及される際記述されている“Colonial”である。ここでは「植民地の住民」、つまり当時のイギリスの植民地の国々を思い出すことが必要であった。この一語が書かれていることで、国籍がどんな人であっても、今の婚約者には匹敵しないことが強調されているということがわかった。

3.3. 正しい訳にするための文法

学生たちが見落としていた文法事項を2つ挙げる。一つ目は昨年テキストでもあったが、分詞構文についてである。曖昧な訳になっていたこと、また学生が見落とす可能性が高い構文のためみんなで確認した。日記の初日の7月7日の記述、“My poor mother, having gone over most of this ground many times before, ...”である。分詞構文にする前の理由を表わす接続詞を加え、「お母様はこの場所に以前に何度も行ったことがあるので」と修正した。同様の構文がその後4箇所あったが、事前に講師が注意喚起をしたことで誤訳は避けることができた。

二つ目は譲歩の“as”の使い方である。7月24日の記述、“Anxious as Caroline was about this pony of hers before starting, ...”である。譲歩を表わすこの構文の場合は、形容詞や副詞が文頭にくることを思い出す必要があった。「キャロラインは出発前にこの子馬のことを心配していたけれども」と訳した。文法の復習と辞書を丹念に読むことの重要性を実感した箇所である。

3.4. カタカナ語の意味の選択

このテキストを訳していく途上、私たちが普段よく耳にするカタカナ語の影響を少なからず実感した。いずれも副詞である。7月21日に出てくる“jealously”は「ジェラシー」とカタカナかつ名詞として訳していたが、文脈から考えて「注意深く」にした。また、7月24日に出てくる“naively”の訳は、「ナイーブに」と訳すとテキストの本来の意味が曖昧になっていたため、辞書の確認をして「無邪気に」と訳した。

曖昧な訳になる場合は必ず原文に戻ることに、そして普段カタカナで使用している言葉に関しては辞書で確認する必要があることを学生たちは実感した。

3.5. 比喩と長文

私たちが進めた箇所までに3箇所の比喩が使用されていた。10月20日に出てくる、“... she (Caroline) drooped like a rain-beaten lily.”（彼女は雨にうたれた百合のようになだれた）は、キヤロラインが母の死にショックを受けた後、ふさぎ込んでいる様子を表現する比喩であること。翌年の4月30日の記述にある、“This month has flown on swallow’s wings.”（今月はツバメの翼に乗っているように過ぎ去っていった）は、月日が経つのが早い様子を表現する比喩であること。5月9日の記述にある、“... waited like two newly strung harps.”（二つの新しく弦を張られた豎琴のように待った）は、姉妹が二人で神経を張りつめながら待っている様子を表わす比喩であると解釈した。いずれも日本語では使用しない比喩であったため、履修者全員が納得できる訳をつけた。

次に長文についてである。テキストの一文はダッシュとコンマが多用されていた。日記という形式のため、書き手の考えや疑問など途切れることなく続く記述は長文が多く、書き手、アリスアの語調で読者が理解しやすい訳をつけることは容易ではなかった。

4. おわりに

日記形式のテキストは学生たちにとって初めて読むテキストであった。登場人物が少なかったため、一度書き手の語調などが決めたあとは読みやすかったようだ。毎回の授業後に提出してもらうリフレクションペーパーとアンケート結果から言えることは、学生ひとり一人が時間を確保してテキストの予習に時間をかけていたことがわかった。次第に進む話の先を知りたいがために予習をかなり先に進めている学生もいた。テキストの選択は学生の学習意欲を左右する大きな要素だと実感している。

前回の研究ノート同様、学生たちは毎回何らかの発見と反省をしていた。英語を単に日本語に置き換えるのではなく、より文脈に合った日本語の語彙の選択に苦労した。また、日本語、英語

だけではなく、テキストの背後にある地理や歴史の知識を持っていればよりわかりやすい訳ができることにも気づいた。

5. 試訳

最後に、15回の授業2で終えたテキストの訳を掲載する。担当者の訳をできる限り使用する。しかし、クラスのみんなの意見により修正した箇所、および講師が訳の編集を行なう際、修正を加えた箇所もあることを付け加えておく。

I 姉は妹を恋しがる

7月7日 — 私は何とも言えない悲しみの中家の中を歩き回っていた。というのも私の大好きな妹のキャロラインがお母様と出かけて行ってしまい、これから何週間も会えないからだ。お母様と妹は旧友のマーレット家から長年招待を受けていて出かけて行った。マーレット家はパリよりも物価が安いという理由でベルサイユに住んでいる。そしてお母様はキャロラインにフランスやパリを少し見せるのもいいだろうと考えたのだ。しかし私は妹を行かせたくなかった。キャロラインの子供っぽい無邪気さや優しさが失われるかもしれないと恐れたからだ。それがあの子らしいところだし、人里離れたところで培った性格なのだから。出発前の彼女の子馬に対する気遣いはいじらしいくらいだった。そして妹は子馬に何も起っていないかを見に行くよう私に約束させた。

キャロラインは海外へ、私はここに残った。いつもと逆の立場だ。いいか悪いかわからないが、いつもだったら私が出かけている方なのに。キャロラインの若々しい熱心さにお母様はとても疲れるだろう。妹はすべての場所に行きたいと言うだろうから。もちろんパリへも頻繁に。歴史愛好家が行く全ての寺院、宮殿や刑務所、王や女王の墓、墓地、美術館や王の狩猟地に。気の毒なお母さまは昔そこに何回も行ったことがあるので、キャロラインほど愉快地楽しむことはできないでしょう。私もお母さまたちと一緒に私も行くことができたならよかったのと思う。私はキャロラインを喜ばすために歩き疲れても気にしなかったでしょう。しかしこの後悔はばかっている。私はもちろんできなかった。教区民の人たちの応対やお茶を出す人がいないのにお父様を一人で残していくわけにはいかなかったのだ。

7月15日 — 今日キャロラインからの手紙がきた。不思議なことに、それには私が期待していたようなことは何も書かれていなかった。つまらないことを詳しく書いているばかり。彼女はパリの輝かしさに目がくらんでしまったようだ。少し見物するだけなので、実際よりも輝いて見えるのに違いない。もしパリに住んでいれば、その裏側も見えてくるだろうけど。マーレット家がそ

んなに多くの人々を知っているとは気付かなかった。母が言うように、もし彼らが経済的な理由でベルサイユに移り住んだとすれば、偶然近所になった知人たちをもてなすことを習慣としていては、その移住にあまり効果はないでしょう。彼らがイギリス人だけをもてなしているわけではないようだ。キャロラインからの手紙に書いてある、母がとても興味を持っているムッシュ・ド・ラ・フェストという人物は誰なのでしょう。

7月18日 — またキャロラインから手紙が来た。この手紙を読んでわかったことは、シャルル・ド・ラ・フェストさんは「マーレット家の大勢の友人のうちのひとりにすぎない」こと、生まれはフランスで、今は一時的にヴェルサイユにいるけれど、イングランドにとっても長い間住んでいたことがあること、風景や海を描くことに長けている画家で、サロンに出展をしたことがあり、そしておそらくロンドンでも出展したことがあるのだらう。彼の絵の表現法やテーマはヨーロッパ大陸風というよりイギリス風と思う人が多く、パリでは多少独特だと思われる。今までのところ彼の年齢や、既婚か未婚かは分からない。キャロラインの彼についての話の内容や様子からだと、彼は家庭のある中高年のように思われるときもあるし、全くその逆に思われるときもある。でも彼の旅をする生活からすると、独身のように思える。彼は旅をし、沢山のものを見てきていて、キャロラインが知る以上に彼は英文学について詳しいということだ。

7月21日 — キャロラインからの手紙。疑問「私達の友達でありマーレット家の友達」は、名前を書かず、謎めいた書き方をしている人は彼女の前の手紙に出てきた、デ・ラ・フェストさんと同じ人物だろうか。彼の仕事からすると同じ人物に違いないと思う。もしそうなら、どうして突然語調が変わったのだろうか。私は、前の文を書いてから少なくとも15分は考えにふけている。私のかわいい妹が若いこの男性に恋しているとしたら、厄介で危険なことだ。もはや彼の歳について疑いはない。私は、お母様が成り行きに注意してくださることを望む。でも、気の毒なお母様は事に変化がおわかりにならないのだ。実はお母様は私よりもキャロラインの母親らしくないのだ。もし私がそこにいたら、注意深く彼を見て彼のもくろみを確かめたでしょうに。私はキャロラインよりも精神的に強い。私は過去に彼女の小さな問題や、大きな悲しみを通して、彼女を支えてきた。彼女にとって、新しくて不思議な感情は彼女を動揺させているのだろうか。でも、私はなにも証拠がないのに、妹がひどく恋していると思っている。この男性はこれから耳にもしない、ただのうわべの友達にすぎないかもしれない。

7月24日 — やはり、思ったとおりに彼は独身だった。「もし彼がいずれ結婚なさるなら」などと、妹は手紙に書いている。彼らが親密になってきているのは明らかだ。「私が髪を整えるのに使っているものを、彼は自分の口ひげの先を整えるのにもいいって言ったのよ」などと、私にも二人の親密さがわかってしまうことに気づかないほどとても無邪気だ。それにしても、お母様はいったい何をしているのだらう。このことはご存知なのだろうか。もしそうなら、なぜ手紙でお父様

にそれとなく伝えないのだろう。

私は今キャロラインの子馬を見に行ってきた一妹の子馬がきちんと世話をしてもらえているか毎日欠かさず見て欲しい、という繰り返しのお願いに従ったのだ。出発前は自分の子馬のことが心配そうだったのに、今は気の毒な動物のことなど手紙で一度も触れていない。愛馬の姿は他のもの取って替わられてしまったようだ。

8月3日 — 子馬への気遣いを忘れてしまった妹は当然姉である私にも及んできた。最後の手紙から10日も経っている。お母様からの便りがなければ、私は彼女が生きているのか死んでいるのかもわからない。

II 興味深く重大な知らせ

8月5日 — 手紙が立て続けにくる。一通はキャロラインからで、もう一通はお母様からだ。さらに二人からお父様宛の手紙も届いている。

最近私が妹の手紙のすべての情報から思っていた、起こりそうな事柄が現実になった。愛しのキャロラインとド・ラ・フェストさんの間で婚約というか、婚約に近いものが交わされた。キャロラインはとっても幸せそうだし、お母様もこの上なく満足している。もちろんマーレット家にとってもそうなのだろう。マーレット家の人々とお母様は、その若い男性についてすべてを知っているようだ。私はキャロラインの姉なのだから、彼についてもっと知らされてもいいはずだ。キャロラインの婚約を受けてとても驚いているお父様の気持ちにも同情するし、全てに納得しているわけではないことがわかる。その婚約という段階に行き着く前に一度も相談されなかったのだから。お父様はとても優しいからそこまで率直に言えないのだろうけど。

私たちの意見のために良いことが邪魔されるべきだとは私は言わない、それが良いことであるなら。でも、その知らせはあまりに急すぎる。この結果が起こるだろうということを少し前からお母様は予測していたに違いない。そしてキャロラインは彼についてマーレット家のただの友人であるなどと、とても不自然にほめかしたり、後に彼の名前をすっかり出さなくなったりしないで、ド・ラ・フェストさんが恋人であることをもっとはっきりと私に知らせても良かったのに。お父様は彼がフランス人であることにはっきりと反対していないが、イギリス人かあるいは他の道理をわきまえた国籍の人が義理の息子であれば良かったのにと考えている。しかし、私は人種や国や宗教の区別は日々なくなってきており、愛国心は一種の悪徳であり、この場合人格のみを考える必要があると私はお父様に伝えた。もし彼らが結婚するなら、彼はベルサイユに住み続けるのか、あるいはイギリスに来られるのだろうか。

8月7日 — 前に書いた私の疑問に先に答えている追加の手紙がキャロラインから届いた。彼女

は私に、シャルルさんは現在ベルサイユを拠点にしているが、彼の職業柄ベルサイユに住み続ける義務があるということではなく、思想や芸術、文化の中心から離れていないならば、彼女の望むところに住むつもりだということだ。お母様と妹は共に、結婚は来年まですべきでないと考えている。彼は風景や運河の景色を毎年発表しているので人気があり、収入は二人の生活が快適に暮らしていくには十分であるのだろう。もしそうでないならば、お父様が彼らに対して予定していたものより多く財産をあげて、私のためのもの分を少し減らすことを考えたらどうだろうか。しかしそれは私の方が先にそのようなことが必要になると思われていたのだけだ。

「魅了する物腰、魅力的な容貌、徳の高い性格であること」というのが、彼がどのような人なのかという私の質問に対する妹の答えである。曖昧な説明だ。私はひとつでもはっきりとした事実、肌の色や声の感じ、行動や考え方などが知りたかったのに。あの子は具体的な特質を見極める目を持っていない。彼のあるがままを見ることなどできない。きらめきに照らされている相手の姿しか目に入っていないのだ。他のどんな男の人であろうが、外国人であろうが、イギリス人であろうがイギリスの植民地の人であろうが、これからはどんな人にも当たらないような光に照らされて。私より2つ下、性格的には5つ下といってもいい子どもっぽいキャロラインが私より先に婚約するなんて。しかし私たちが知ってる以上にありがちなことなのだろう。

8月16日 — 今日興味深い知らせが届く。彼女が言うには、シャルルさんが彼らの結婚式を来年挙げるのかもしれないのなら今年でもいいのではないかと主張し、そしてお母様も同じ考えに変えさせてしまったようだ。私自身延期する理由が少しも見つからない。今までシャルルさんのことについて、結婚の時期、またはその他のことにお父様が意見を表す機会がなかったという状態であったことを除いては。しかしながら、お父様はとても静かにお立場を受け入れており、彼女達は、私達と話し合うために帰国することになっている。キャロラインはどうやら私に会うまでは、この状態を変えるための計画を積極的に進めないことを決めたようだ。私とお父様が賛成すると仮定して、結婚式の日には今から3ヶ月後の11月に決めたこと、おそらくこの村で式を挙げて、もちろん花嫁の付き添い人は私であるということ、そして他にもたくさん詳細に書いている。

うちの古い教会の祭壇で、ロマンティックな結婚式を挙げれば、村の人達が感動するだろうということを無邪気に書いている。主役を演じるのは彼女で—外国の紳士が、神様のように天から降りてきて、彼女を抱き上げ勝ち誇ったようにさらっていく—そんな筋書きのようだ。彼女が唯一悲しんでいること、それは私と離ればなれになってしまうこと。でも、それは私が妹のところへ行って、一度に長い間彼女と共に滞在することで和らげられるでしょう。こんなごく普通の純真なおしゃべりを私は楽しみであったけれど、かわいい妹よ、あなたが結婚していなくなることを考えたら悲しまずにはいられない。ものの道理上、私はもう、あなたの案内役にも、相談相手でも、ほかの誰よりも親しい友達にはなれないのだから。

ド・ラ・フェストさんはきっと、キャロラインのように敏感で、心が傷つきやすい子の保護者として、誰もが望むような人なのでしょう。そのことを、私はありがたいと思っている。

それでも、私は彼女の目を通してしか彼のことを見ていないということを忘れないようにしなければならない。彼女のために、私は彼に会うことを切望し、彼を徹底的に調べ、そしてこのような宝物を手に入れる男の人がどんな人なのかということを知らなければならない。この婚約は確かに少し焦りすぎた。それについては私はかなりお父様に賛成している。それでも、幸せな結婚今まで急いで交わされていたし、お母様はとても満足しているように思える。

8月20日 — 今朝、ひどい知らせが来て、私たちは深刻な問題に陥った。私は今の時間まで自分の考えをまとめることができないでいた。今は夜11時半過ぎ。私は何もしない状態では落ち着かないので、これらの短い日記を書こうとだけ試みた。そしてただ待つこと以外何もない。お母様がベルサイユで重病にかかってしまった。彼らは1日か2日以内に出発する予定だったが、現在のお母様の状態では動かすことができないので、予定を延期しなければならない。お母様のようによく育った女性の大出血という響きは好ましくない。キャロラインやマーレット家の人々が大きさに説明していないことは確かだ。お父様は手紙を受け取るや否や、お母様のところへ行くことを即座に決めた。そして、私はお父様の出発準備に一日費やした。お父様は数日間家を空ける計算をしているので、出発前に手配することがたくさんある。来週の日曜日にお父様の代わりをしてくれる人を見つけなければならない。とても突然な知らせだったので少なからず難しかった。けれど、色々苦労してついに弱々しい老人のダグデイリ氏が礼拝をしてくださることになり、聖書朗読者のハイマン氏も日課を手伝ってくださることになった。

私は出来ることなら父と一緒に待ち受ける面倒な事から逃げたかった。しかし誰かが家に残らなければならない。そして私が残ることが一番都合が良かった。ジョージはお父様が深夜船に乗るための最終電車で着くように父を車で送った。朝にはアーヴルに着くだろう。お父様は海が嫌いだ。特に夜の海は。私は彼が何事もなく到着する事を願う。いつも家にいるお父様なので、使い走りやちょっとした面倒な事にも対応できないのでやはり不安だ。このような用向きの旅なんて十分に悲しい旅になるだろう。そのように考えると、やはり私が行っておくべきだった。

8月21日 — 昨夜、私は無気力で日記を書きながら眠りそうになった。父は今頃パリに着いたにちがいない。たった今手紙が届いた。

追記 — 手紙には、お父様はもう出発したかという真剣な望みが書かれていた。かわいそうなお母様は衰弱しており、彼らは心配している。キャロラインはどうしているだろう。私もお母様に会えたならよかったのに、なぜ二人とも向かわなかったのだろう。

追記 — 私は椅子から立ち上がり、窓から窓へと歩いて、また日記を書いている。もしお母様が亡くなってしまったら、かわいそうなキャロラインの結婚がどうなるのか予測さえできない。お父様が間に合ってお母さんと話ができますように。そしてキャロラインとド・ラ・フェストさん — お父様も私も会ったことのない男性 — との今後のことについてなにか聞いてくれますように。この緊急事態で役立つだろう私は、不安の中、ただここで待っているしかない。

8月23日 — お父様からの手紙には、お母様が亡くなったという悲しい知らせが書かれていた。かわいそうなキャロラインは打ちのめされてしまっている。彼女はいつも私よりお母様のお気に入りだった。お父様は間に合って母の口から、キャロラインの結婚式をできるだけ早く挙げるべきだという強い願いを聞くことができたのを知って、私の多少の慰めになった。ド・ラ・フェストさんは私の親愛なるお母様にとっても気に入られていたようだ。そして今となってはお父様も非難せず彼を義理の息子として受け入れることも神聖な義務だと私は思う。

III 妹の喪失感が和らぐ

9月10日 — 2週間以上何も日記に書かなかった。起こったことが私にとって悲しすぎて書く気がわかかなかった。でも、その困難を記録する行為は、後にじっくり考える方法として歓迎される時が来るだろう。

愛しのお母様は家に運ばれ、教区で埋葬された。それはお母様の希望というよりお父様の希望で、とりわけ自分の妻を先祖代々の地下納骨堂で、父の最初の妻の隣に埋葬すべきだと望んだのだ。私は納骨堂が開められる前に彼女たちをそばで見た — 一人の男性に愛された二人の女性を。そしてキャロラインと並んで立っていると、夢でもみている気持ちに陥った。キャロラインと私もまた一人の男性に愛され、この2人の妻たちのように埋葬されるのではないかという奇妙な空想を — もちろんそんなことは姉妹だからありえないのだけど。愛しのキャロラインは私の手を取り、「もう行きましょう」と言った時、私は空想から覚めた。

9月14日 — 結婚式が無期限で延期された。キャロラインは夢遊病の最中に目を覚ます少女のように、自分がどこにいるのか、いや、どうやって立っているのかもわからないでいる。彼女は黙ったままあちこちを歩き回って、私は彼女が何を考えているのか以前にはわからない。ド・ラ・フェストさんに手紙を書いて、結婚式をもとの計画通りこの秋に挙げられないだろうと伝えた。ともかく彼女が彼と結婚するつもりならこの長い延期はとても気の滅入ることだし、私はまだどうすれば解決するのかわからない。

10月20日 — 私はキャロラインを慰めるのに忙しかったため、日記を書くことをずっとないがし

ろにしていた。彼女は私よりお母様との距離が近かった。彼女は私のように人を頼らない生活ができるほど家を長く離れたこともないので、生まれ初めて身近な人を失い、それにとまってさまざまな出来事が一気に起こったので彼女は雨に打たれたゆりのようだった。でも彼女はすぐに立ち直る性格だし、最も落ち込んでいた時期も過ぎた。

お父様の意見では、結婚式はそんなに長く延期すべきではないということだ。ベルサイユにいる間にお父様はド・ラ・フェストさんさんと知り合いになり、短い間の急いだ交流だったが、お父様はド・ラ・フェストさんの性格や行いにとても感動したようで、彼のキャロラインに対する求婚を強く支持している。キャロラインの婚約者が、近くに来る人全員が彼のひいきになることはとても不思議なことだ。親愛なるキャロラインが私に見せてくれた彼の写真は、少しこのことを説明するような風貌を表している。しかし、単なる外見だけではなく、おそらくそれ以上の魅力や人を魅了する何かがある — キャロラインが私に彼のことを正確に説明できなかった類のものを。同時に、写真を見ると、彼は顔と頭の形がとても良い。彼の口の輪郭はひげのせいで隠れているが、彼のアーチ形の眉は本当の自然を心から愛する画家らしくロマンティックな性質をよく表している。このような顔の持ち主は、優しく思いやりがあり、誠実であるに違いないと思う。

10月30日 — 妹のお母様に対しての深い悲しみはだんだん落ち着くにつれて、ド・ラ・フェストさんへの彼女の愛は初めの頃のように夢中になっている状態へ再び戻っていた。妹はド・ラ・フェストさんさんのことを絶え間なく考え、彼への手紙は論文ほどの量を書いている。彼が私たちに約束したように、すぐにこちらに訪れることができない、という彼の知らせに対する彼女の大きな失望はとても悲劇的だった。私も彼に会いたかった。というのも、彼に会って、どんな人なのか彼を見定めたかったから。けれども、この秋の時期でないと捉えることができない色彩を絵にするためにオランダへ行く予定を立ててしまったそう。だからこちらへの旅はやむを得ず年明け早々まで延期するとのことだった。彼は何をおいても、こちらに来るべきだったと私は思っている。キャロラインは母親を亡くしたばかりだし、楽しみにしていた結婚式が延期されてしまったこと、キャロラインが彼のことを一途に思っていることなどを考え合わせるなら。とはいえ、どうすべきなのか誰にわかるだろう。彼の仕事がうまく行くことが何よりも大切なことから。それにキャロラインは陽気で楽天的な性格である。予定が先延ばしになってもすぐに立ち直るだろう。

IV 魅力的な訪問客をみつめる

2月16日 — 書きとめる必要のある重要なことは何もなかった冬の間ずっと、私たちは退屈な日々を過ごした。だから私は日記を書くことをやめてしまった。それでも愛しのキャロラインの将来について書くために日記を再開している。お母様を失った直後は、キャロラインはとても深

く悲しんで、ド・ラ・フェストさんはどのくらい式を延期するのか、という質問にもはっきりと答えられなかったようだ。その後、この件は彼の秋の訪問で話し合うべきだと意見が一致した。けれども、彼は来なかったので、今週まで一時的に中止したままだった。今週になってキャロラインは大変な無邪気さと率直さと信頼をもって、彼にさらなるプレッシャーをかけないよう手紙を出した。キャロラインは結婚の日時を定める準備ができていて、彼が彼女に会いに来たらすぐに式について決めたいと伝えた。彼女は今少しおびえていて、自発的にこの話を復活させるなんて、と思っているようだ。

しかし、彼女は彼の質問にお母様が亡くなって以来答えておらず、それ故に彼女は約束を果たしたにすぎないと考えていいだろう。実を言うと、彼らの結婚の問題が中断していることを最近彼は彼女に思い出させなくなっていたことに対して妹は悲しんでいる。つまり、簡単に言えば、彼にあった彼女を得たいという最初のような強い思いは、今やそれほど明白には彼を駆り立てるものではなくなった。私は彼が妹を今までと同じように愛しているように思う。彼女がどれほど愛らしいかを見るとそうであるに違いないと思う。ほとんどの男性は女性が彼らの目の前にいない時、無頓着になる。キャロラインは我慢して、才能ある人には重要な多くの時間が求められることを忘れないようにしなくてはいけない。公平に言えば、彼女はそのことをとても良くわかっていて、そのような状況におけるどんな女性よりも忍耐強いことを私は付け加えなければならない。彼は遅くとも四月の初めには来るように願っている。そして、彼が来たら私たちは彼に会えるのだ。

4月5日 — ド・ラ・フェストさんの手紙は十分に道理にかなっていると思うが、キャロラインはそのことについて悩んでいるようだ。彼にとっては、わざわざ海を越えてイギリスにやって来て、またすぐに戻らなければならないので、かなり海が荒れている中、会いに来ていただくわけにはいかない。とにかく、5月になれば仕事の目的でロンドンに来られるので、その時であれば、彼にとって行きも帰りも都合が良いはずだ。キャロラインが彼の妻になれば、彼女はより現実的になるに違いない。しかし、彼女は今のところ子どものようで、理屈で満足させることはできない。とはいえ、嫁入り支度など、しなければならないことがたくさんあり、時間はすぐに過ぎていくはずだ。余裕を持って支度するためには、今すぐ取り掛かる必要がある。キャロラインは半喪期に結婚するべきではないと思う。もしお母様がそのことを知ったらそれを望まないだろうし、この点においては、いつも従順なキャロラインがかたくなに意地を張るのは奇妙だ。

4月30日 — 今月はツバメの背に乗ったような勢いで過ぎていった。私たちはとてつもない興奮状態にある — 私ですらキャロラインと同じくらいに — それが何故かは完全には分からないけれど。彼が手紙で書いているには、10日後、本当に彼がいらっしやるらしい。

5月9日午後4時—私は書くことができないほどに興奮してしまっている、それなのに部屋を出ていく前にどうしても日記を書くように駆り立てられている。私がばかみたいに興奮しているのは、予測していた出来事が、予想もしない形で起こったからで、それは私がキャロラインと同じような女学生とさして変わらないことをはっきりと示した。

ド・ラ・フェストさんは、私たちが聞いていたように、明日まで来られないはずだった。しかし彼は今ここにいらっしゃる—ちょうどお着きになったところだ。お父様はド・ラ・フェストさんが1日早く私たちの前に現れるとは思わず、郵便がくる時間の前に遠方の奉獻式へと出かけてしまっていたので、家のことはすべて私に任されていた。そこでシャルルさんからの手紙を開けると、彼がアトリエでの仕事を思いがけず都合よく片付けられて、この手紙の後に続いて数時間でやってくるとあるので、キャロラインと私は驚かすにはいられなかった。私たちは手紙で示されていた時間の列車を出迎えるために馬車を送り、まわり続ける馬車の車輪の最初の音をまるでふたつの真新しい堅琴かのように待ち詫びた。ついに馬車の車輪が砂利を踏む音が聞こえた。そして誰が彼を迎えるかの問題が浮かんできた。それは厳密に言えば、私の仕事だったけれども気後れした。その仕事を押し付けられないではいられなかったし、キャロラインが行くべきだと私は主張した。普段誰かが来た時にはドアの近くに迎えに行くのに、キャロラインは結局行かず、今日はドキドキしながら客間で待っていた。彼は静かな玄関と明らかに人気のない家を見た時には、まさにその瞬間、家中が好奇心でいっぱいだとは思わなかっただろう。私は階段の下からは誰も私のことを見ることができない踊り場の奥の方に立って、玄関を横切る彼の足音—お父様の足音よりも軽い—を聞き、客間に入る音を聞いた。そして召使がドアを閉め、立ち去ったのを聞いた。

彼ら二人だけで、楽しい再会を目一杯味わっただろう。黒の喪服のキャロラインが顔を見上げた時の愛らしい顔—きっと彼の心に響いただろう。キャロラインがひどく泣いている声が、こちらまで聞こえてきた。彼女の目はきっと真っ赤になるだろうが、それも仕方ないことだ。彼女は幸せなのだから。これを書いている時も彼女が彼と何を話しているのか想像できる。彼が来るのを妨げるようなことが起きるかもしれないと思うと怖くてたまらなかったとか、どうしてもっと早く来ていただけなかったのか、と微笑みながら責めたり、そんなことをしているのだ。彼の旅行かばんが階段の踊り場を通して部屋に運ばれている。私もそろそろ降りていった方がいいだろう。

数時間後—彼にやっと会えた！こんなふうに偶然会うとは思ってもいなかったので、私は困惑した。すぐに彼の旅行かばんが運ばれて、私は下へ降りるために自分の部屋を出た。そうして階段の最初の段に足をかけたとき、下の玄関ホールにあるものが目に飛び込んできた。少しの間止まってそれを眺めた。キャンバスの束や棒、スケッチをするときに組み立てる天幕や画架を。

注

1. テキストは、*Alicia's Diary* 504265LV00019B/1719/Pを使用した。
2. 授業の初回はオリエンテーションの時間も入っているため、実質約1時間の時間を授業にあてた。

引用文献

黒澤純子（2017）短編小説翻訳の試み『東邦学誌』第46巻 第2号, 187-202.

受理日 平成30年10月1日